

没後八十年 島木赤彦遺墨リレー展

期間 平成十七年六月四日(日)～十二月十八日(日)

主催・会場 茅野市八ヶ岳麓文芸館

はじめに

平成十七年(2005)は、赤彦没後八十年にあたる。当文芸館(茅野市八ヶ岳総合博物館併設)では、これを機会に「島木赤彦遺墨リレー展」を企画開催した。

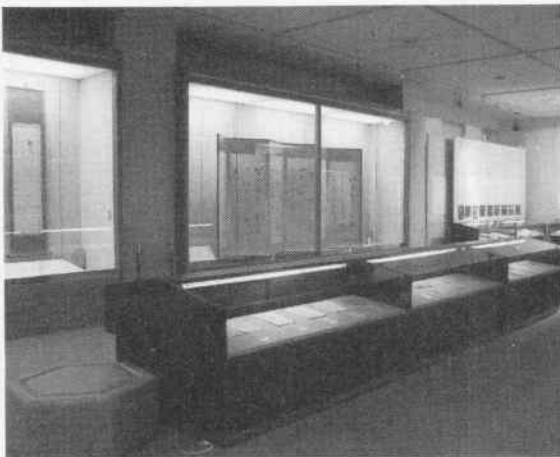


文芸館展示会場入口

一、企画展の目標

帯川豊太郎宛及び両角喜重宛各書簡、塩尻市立広丘小学校の新校訓、歌誌『アララギ』の最終校正原稿など、未公開の作品が相当数あることが判明した。赤彦研究はすでに幅広く深まっているが、今回は特にその未公開の赤彦作品を、可能な限り数多く展示することに力を置いた。

赤彦が師と仰ぐ正岡子規および伊藤左千夫の書簡、岩垂今朝吉の書など特別出品を加えると百点余の多くに達するので、全期間六ヶ月を三区分けし、全て効果的



展示会場、中央奥に六曲半双金屏風

に展示すべくリレー展の形を採った。

二、展示期間の三区分けと期間中のイベント

☆第一期Ⅱ青年期

二十歳代(明治三十八年まで)、新進教師の時代。長野師範以来の親友、帯川豊太郎宛の友情溢れる書簡数展を初公開他。

展示期間、六月四日(土)～八月四日(木)

展示解説、六月十二日(日)、二回

☆第二期Ⅱ壮年前期

三十歳代(明治三十九年～大正四年)。

広丘小学校新校訓、両角喜重宛書簡の初公開他。

展示期間、八月十二日(金)～十月十日(月)

展示解説、九月十日(土)、二回



展示解説



赤彦 35歳

現地探訪「茅野の赤彦を訪ねて」

九月四日(日)、午前中

講師北澤敏郎、参加者35名

☆ 第三期(壮年後期)

四十歳代、没年まで(大正五年〜大正十五年)。

『アララギ』最終校正原稿の初公開他。

展示期間、十月十八日(火)〜十二月十八日(日)

展示解説、十一月二十日(日)、二回

記念講演会「赤彦を語る」、午後

講師北澤敏郎、参加者64名

三、初公開品について

赤彦遺墨展は、かつて茅野市美術館(北澤敏郎館長、当時)が主催して開催された。爾来、二十年が過ぎ、節目に当たる今回の企画で初公開品から少しでも何か新しい赤彦像を観ることができればと考えた。



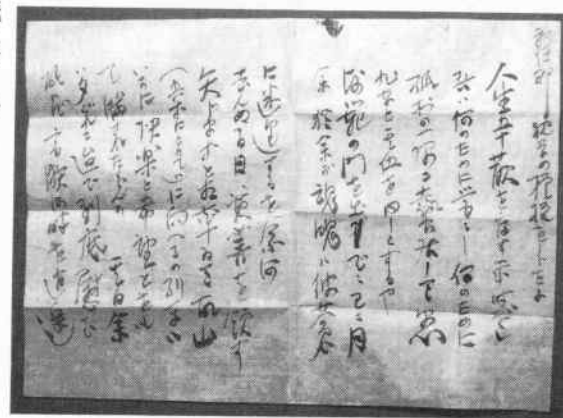
明治31年3月10日
同身教師長師生一同
諏訪郡出身の教員長師生一同
最後列右から2番目、帯川豊太郎
同 3番目、久保田俊彦
(21歳)

南信日日新聞紙上に平成三年一月一日から五月二十日まで、茅野慶次(諏訪市文化財審議委員、当時)の「島木赤彦 知られざる青年時代の書簡類(久保田俊彦―帯川豊太郎)」が十二回にわたり掲載された。しかし、

その実書簡は今回の遺墨展が初公開である。本稿では特徴ある二通を取り上げる。

(1) 帯川豊太郎宛書簡(その一)

第一期展示



書簡「人生五十歎」(赤彦22歳)

(読み下し)

新任郡視学の模様をしらせる

人生五十歎を宿す幾時ぞ。

吾ハ何のために営々し、何のために

孤村の一隅に蟄居して愚

輩と其伍を同じくするや。

師範の門を出でて已に二月

余猶余が魂魄ハ彼(の)蒼

に迷遇するを奈何。

去んぬる日貴書を領す。

矢じま等と相率ゐて故山

(吾等にとりてハ)に向へる列車ハ

いかに快樂と希望とを以

て満されたらんか。其日余

ハ夕ぐれにまで到底慰む
能はず。高瀬河畔を逍遙

して遠き遠き北天を望ミ藤

村作るところの離別のうたを

うたひつくして薄暮宗家

二かへり申候。

(解説)

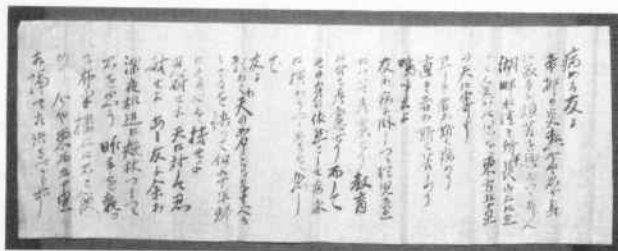
久保田と帯川の二人は明治三十一年三月、共に長野師範を卒業。久保田は北安曇郡池田小学校に、帯川は南佐久郡田口小学校にそれぞれ赴任した。上書簡は同年五月六日のもの。

久保田は自分を新任視学(指導主事)に見たてて感懐と安曇地域の同窓の動静などを帯川に知らせている。

(2) 帯川豊太郎宛書簡(その二)

第一期展示

「病める友よ」



豊太郎への見舞状(赤彦30歳)

(読み下し)
病める友よ。

帝都の炎熱今や君が身

に幾多の煩苦を与えつつあらん

湖畔水湧き所手長山上に立

つて遙かに思を東方五十里

の天に寄す

正しき者わ斯く病めり。

嗚呼友よ。

友わ病に臥しつつ猶児童

について考慮せり教育

に付て考慮せり而して

その身の依然として病床

に横たわりつつあるを悲し

む。

友よ。

願わくは天の如何ともなすべか

らざるを悟つて何卒平静

にその心を持せよ。

忍耐せよ。天に対して忍

耐せよ。ああ友よ余わ

深夜机辺に頬杖つきつつ

君を思う。昨、手を執つ

て布半楼上に君と飲

めり今や東西五十里

相隔て相語るべからず。

学校に君居らず。何かに

つきて相叙し

温泉に入るに君在らず

酒飲むにつき心叙し

友よ

平静なれ

忍耐なれ

学校の友等皆壮健

事に従えり

子供皆元氣よし御

安心アレ

此の手紙を書くとき今井

栄君と相語る。感慨忡々

平静なれ

忍耐なれ

七月十日夜 俊彦

帯川兄

高島の古城を

死守する数輩

わ君に対して只

額を鳩むるのみ。

友よ。

(解説)

帯川は、明治八年七月米沢村(現茅野市米沢)五味太郎兵衛二男として誕生。二十四年(16歳)帯川平右エ門の養嗣子となる。三十四年(26歳)諏訪高等小学校に転任。三十七年(29歳)同校に久保田が玉川小より転任になり、友人同士の二人は同僚として勤務することになったが、帯川は三十九年(31歳)東京高田病院にて他界した。帯川の病状が急であることを妻むめ輿から知らされたものであろう。久保田の帯川を思う切々たる友情があふれている。

(3) 豊太郎宛書簡がなぜ未公開のままであったのか。

平成六年三月二十一日の長野日報紙に寄せた郷土史研究家五味和男の文章を概略して、書簡未公開の理由を明らかにしたい。――師範で数学を専攻した帯川は久保田とは文学活動を通じた仲間ではなかったが(：

の個所は編者加筆)、性格が合ったのか、師範在学のときから親しい交際が始まり、豊太郎没まで兄弟以上の付き合いがあった。

昭和五十年代後半、長峰中学校岩下貞保教諭が『赤彦全集』中から「学友帯川豊太郎」の字句を見出し調査に手がつけられた。豊太郎没後八十年がたっていた。岩下が訪れた塩沢の帯川宏(豊太郎の孫)家で、豊太郎生家を継ぐ前述の五味和男を交じえて知られざるエピソードが現われることになった。

豊太郎死亡の時、豊は胎児であつたから、事情を知る由もなかった。死因は急性結核であつた。養父母は結核を極度に恐れ、豊太郎宛の書簡は全部焼却しようとした。亡き夫に來た思い入れのある書簡が焼却されるのを心配したむめ輿未亡人は、豊太郎生家の義兄五味敬太郎に相談、書簡類を預かってもらふことにし、五味家土蔵の鴨居の上に保管されることとなった。

やがて、昭和四年息子豊が長野師範の卒業を機に、件の書簡類を敬太郎がむめ輿に返却したという。この



襦牟庵当時の人々
後列左から3番目、両角喜重
前列左から2番目、赤彦(24歳)

経緯を初めて和男から耳にした孫宏は早速自宅土蔵に入り、昭和四年信毎紙に包まれた赤彦の書簡類を持ち出してきた。封書十一通、葉書十六枚であった。まさに八十余年ぶりに日の目をみたのであった。岩下は書簡を借りコピーをとり研究成果を「帯川豊太郎宛書簡に見る赤彦」と題して、平成元年六月十七日諏訪教育会館にて研究発表をした。

昭和六十三年には郷土史研究家塩沢一保も機関紙『茅野』第二十五号に「赤彦書簡紹介」を発表している。以上が未公開となっていた理由とその後の経過である。

(4) 両角喜重(雉夫)宛軸装書簡 第二期展示



両角喜重宛 (赤彦38歳)

(読み下し)

拜啓種々御心配下され申譯無之候着島以来
丈夫に暮し居り候間御安心下され度候島の風
物すべてよろしく毎日温き空気に浴し居り候
明日の船便にて事によれば帰京すべく然らざれば
今一便船のばし十一月末か十二月はじめに帰

り可申帰京すれば直ぐはがきにて御知らせ可申上
十七日頃迄にハガキ行かねば猶島に居りと
御承知下され度候毎日常衣にて暮し居り候
椿の花さきはじめ候魚を買いて芒の中を
帰り候 こんな単純な生活致し居り候
これから小生も少しは新らしき心に住み得べきか
と存じ候御心配かけますどうか御許し
下され度候
遅き故是にて失敬する
葦穂に右御知らせ下され度候

葦穂は小生病気かと思ひし様子也

病気には無之候間御申聞かせ下され度候

(解説)

大正三年十一月十三日、八丈島より両角喜重宛封書。
葦穂は赤彦の弟、塚原葦穂。

(5) 広丘小学校の新村訓 第二期展示



(赤彦34歳)

(読み下し)

新村訓

奨善會

我等が学校に学ぶは正しく強く美しき心を得んがためなり。正しく強く美しき心は生きるより誰もみな

持てる心なれども、学ぶにより、養ふにより、修むるによりて益々その光を現すに至るべし。光を現さんとする奮励だにあらば、三十年五十年の後は遂に秀れたる人材ともなりぬべし。されば我等

学校にありて大凡左の事柄を心得べし。

一、我等の眼は常に輝き、我等の耳は常に聴く、我等の口は用なき時常に閉づべし。

一、我等の手足は動く時風の如く疾く、休む時林の如く静なるべし。

一、正しきを見ては之に赴かんを思ひ、難きを見ては之を貫かんを思ひ、弱きを見ては之を助けんを思ひ、公事を見ては力を致さんと思ふ。我等の心は幼けれども斯くの如く活けり。

一、一身治りて一級治り、一級治りて一校治る。一校治るの心は、一家一郷一國治るの心なり。我等の身は小さけれども斯くの如くして一國に關せり。

一、巧言令色鮮し仁といへり、剛毅朴訥仁に近しといへり。言はその巧ならんより寧ろ確かなれ。容はその美しからんより寧ろ清かれ。

明治四十三年五月 日 廣丘小学校奨善會

(解説)

明治四十三年、赤彦は広丘小学校校長二年目(33歳)の年に、教授法、復習・訓練の必要を示し、奨善會(児童會)の新村訓を制定した。主旨は、児童の個性伸長、自治の育成を強調したもので、いまま変わることなく同校の教育理念となっている。「歴代の校長が赤彦を

同校の教育理念となっている。「歴代の校長が赤彦を

同校の教育理念となっている。「歴代の校長が赤彦を

同校の教育理念となっている。「歴代の校長が赤彦を

語るの日常のこと。現在も新校訓の色紙をつくり毎年卒業記念品として巣立ちゆく子ら全員に贈呈している(大和義史校長談)。

校訓の実施にあたって「校訓を生かすかどうかは、一に教師の手にかかっている。ただ条文で子どもたちを機械的に拘束するようなものであつてはならず、児童と教場で交わり、庭で交わり、卒業後も交わつてこそ教師である。教師の生命はそのようにして生ずるので」と教職員にとくに要望したという(徳永文一「歌人・教育者 島木赤彦」)。

付記 「新校訓」額の完成は昭和十八年。広丘小学校蔵の、額の裏には左記の通り墨書されている。

昭和十七年度高等科卒業生記念品として贈る

昭和十八年八月 廣丘国民学校

(門外不出)

(6) 歌誌『アララギ』の最終校正原稿 第三期展示 (解説)

『アララギ』の最終校正原稿群から

今回の赤彦遺墨展では、校正原稿のうち大正十四年十一月集・大正十五年二月集・同三月集・同四月集を初公開した。赤彦が自ら朱を入れた原稿は生々しく、八十年の時の流れを感じさせない。この間、第二次世界大戦の激動期を経て資料が現存しているのは幸運といわねばなるまい。(個人蔵)

なお、赤彦編集の『アララギ編集便』の執筆者が、大正十四年十二月号から左記のように、藤澤古實に引き継がれている。赤彦の病状悪化によるものと思われる。大正十四年十月号 編集兼発行者 編集便執筆者

久保田俊彦 久保田俊彦

十一月号

〃

〃

十二月号 藤澤古實
 大正十五年新年特別号 〃
 三月号 〃
 四月号 久保田俊彦 藤澤古實
 五月号 〃 高田浪吉

① 『アララギ』最終校正原稿 大正十四年十月号



(赤彦49歳)

② 歌誌『アララギ』 大正十四年十月号 表紙



四、赤彦の書から

(1) 赤彦の六曲半双屏風について

歌人北澤敏郎によると、「大正四年(赤彦39歳)の暑中、下諏訪高木の家にて竹内泰比呂の為に唐紙に歌を書く。歌は新刊の歌集『切火』の中から芒の歌と椿の歌を十枚の全紙に書かれた。赤彦は「だいぶ大きいな、こんな大きい字は書き初めの書き終りかも知れないよ」と言われたという。うち五枚は竹内に、一枚は息子久保田健次に。

昭和八年七月、竹内の五枚は今井平左衛門に渡り、同野菊夫人が所蔵する。屏風は一枚ずつ五面、残る一面は白地である。屏風の価値について、「日本中にこれ程の大作は無く、字も赤彦の最も脂の乗り切った時ですばらしい」という貴重なものである。

平成十五年(2003)、息子久榮が北澤敏郎を通して茅野市に寄贈され、当館所蔵となった。

(五)



六曲半双金屏風 (赤彦39歳)

(読み下し)

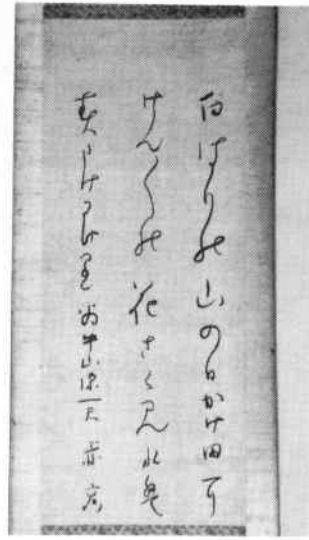
○ 船を出でし心現なし真青なる

○ 芒の中に入りけるかも
一人ぼつたり行きとどまらず

○ 青々し芒の中に一匹の牛を追ひ越しはろかなる道
鳥すすきい行き寂しむ身ひとりの

○ 芒の島あが乗りて来し一つ船
うしろに大き海光り見ゆ
けぶりを吐きて去るにかあるらし
島木赤彦

- (2) 作品に見える書体の変化について
- ① 赤彦二十歳代の書



(読み下し)

白はりの山の日かげ田にげんげんの
花咲くみれば春たけにけり 赤彦

(解説)

青年期は流麗な草書体、二十歳頃の特徴。玉川小学校卒業式当日、赤彦が教え子たちに揮毫した。この書(条幅)は牛山源一に為書きしたもの、明治三十五年赤彦二十六歳と推定される。

② 赤彦三十歳代(推定)の書

諏訪の湖山に日は出て鏡なす
照り輝けど風のすすしき 赤彦

諏訪の湖山に日は出て鏡なす
照り輝けど風のすすしき 赤彦

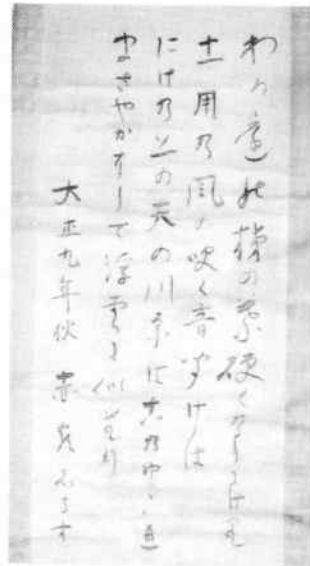
(読み下し)

諏訪の湖山に日は出て鏡なす
照り輝けど風のすすしき 赤彦

(解説)

壮年前期は筆力みなぎる個性的な書体へと変化を示す好例、創作年不詳。

③ 赤彦四十歳代の書



(読み下し)

わが庭の柿の葉硬くなりけり

土用の風の吹く音聞けば

にはの上の天の川原はこのゆうべ

まさやかにして浮雲に似たり

大正九年 秋 赤彦 志るす

(解説)

茅野市立豊平小学校蔵。豊平小学校で赤彦の講演会終了後、揮毫された。赤彦はもう少し太い筆があればと言いつつ、二枚書いたという。意気旺盛にして味わ

いある書体。

おわりに

帯川豊太郎宛書簡「新任郡視学の模様を知らせる」にあらわれた新進教師としての心情。「病める友(豊太郎)よにみられる親身の友情。両角喜重に宛てた書簡に伺える新境地。八丈島での暮しぶりを伝え気分をリフレッシュできたのか、「小生も少しは新しい心に住み得べきか」と伝える等々、従来の赤彦像に多少なりとも厚みを加えることができたのではなからうか。

諏訪の地には、現在もアララギ系グループ他短歌の愛好家が多いのは、赤彦の蒔いた種子が百年を経て、根をはり着実な成長を続け、文芸活動の裾野が拡がりを見せているからであろうか。

このたびの赤彦遺墨展は、遠来の見学者も多く好評を博し、お蔭様で無事終了することができた。偏に地域の方々の親身のご協力と温かい励ましのたまものと感謝あるのみである。今後とも新しい情報なりご感想なりを随時ご教示いただければ幸いである。

このたびの企画展を通して、赤彦の貴重な最高傑作「六曲半双金屏風」を誇りとすると同時に、大切に護り後世に引き継ぐことは、当文芸館に果せられた重要な任務のひとつと改めて考えさせられた次第である。

凡例 年齢は満年齢で表記した。

敬称は省略した。

展示目録

屏風

・芒の歌 五首

△全期▽

軸

・いささかの水にうつろふ夕映に

菜洗う手も□明るみにけり

朝てる日のうすら霜ひえびえと

蓼の丹(に)莖にとけて沁むかな

(前首と同幅) △二期▽

・木曾遊草 五首連作

△二期▽

・足曳きの山の雉夫のなくこゑは

ほろりほろりとたどぎ知らなく △二期▽

・寄書き 赤彦・茂吉・汀川・麓・文明

△一期▽

・仔猫・ふるさと

△一期▽

・死火山の裾野の冬のなほ長き

日数思ひつつ灯をとますかも

西窓のうすら明りにわらをうつつ

隣のおとのはや聞えおり

(前首と同幅) △一期▽

・白はりの山の日かげ田にげんげんの

花咲くみれば春たけにけり △全期▽

・寄書き 赤彦・茂吉・汀川・馬吉・麓 △一二期▽

・あるものは萩刈日和ぼけの果(み)を

二人つみつ相恋ひにけり △一期▽

・野は今白雲のむれの片寄りに

ふきよせられし夕光りかな △一期▽

・ひとつ蟬鳴き止みてとほき蟬

きこゆ山門そとの赤松林 △二期▽

・踊り子の歌 八丈島にて

踊り子のをどるうしろは椿の木

かぐろみ光り月のしたびに △二期▽

・昼すぎとなりて日あたる縁さきの

牡丹の冬芽皮をかぶれり △二期▽

・諏訪の湖山に日は出で鏡なす

照り輝けど風のすすしき △二三期▽

・志都児の出征を励ます歌 山百合

大君の御馬の前に増荒雄の銚執ることを幸と思へ

高麗の山もろこしの野辺草枕旅の歌幸君に多かれ

(前首と同幅) △二期▽

・山道にゆうへの雨の流したる

松の落葉はかたよりにけり △三期▽

・紅梅のそ花をゆすふる潮風の

さむぎにおどろく湯の窓をあけて △三期▽

・わが庭の柿の葉硬くなりけり

土用の風の吹く音聞けば

にはの上の天の川原はこのゆふべ

まさやかにして浮き雲に似たり

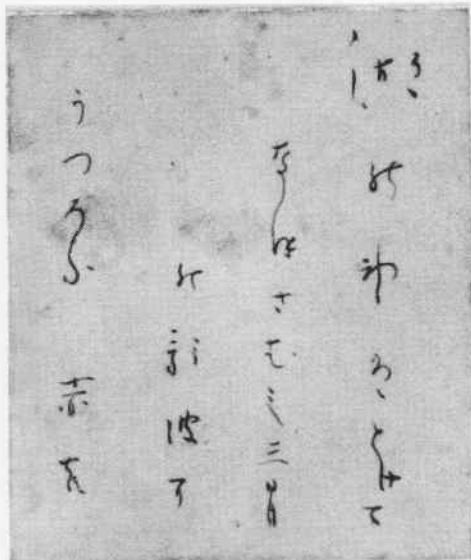
(前首と同幅) △三期▽

・冬の日乃光とほれる池の底に

泥をかうむりて動かぬ魚くつ △三期▽

・湖の水はとけてなお寒し

三日月の影波に映るふ △三期▽



(赤彦45歳)

・野のうへに立ちの短き松林

梅雨近くして雲おほくなれり △二期▽

・書簡 二通 雉夫宛

扇面 △三期▽

・夏の夜の朝あけ毎に伸びてある

夕がほのみすがしむわれは △全期▽

墨帳

・詩 湖の向うの草山の

短冊 △一期▽

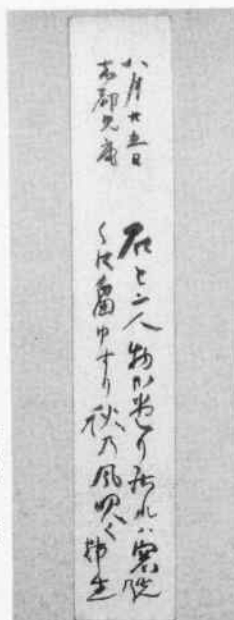
・野の水の遠しらあけに照り残る

君のまたたき草にまじれり △一期▽

・志都児庵にて

君と二人物語り居れば窓先の

くは畠ゆすり秋の風吹く



(赤彦31歳)

・なつかしき湯川の里に一夜ねて

盆うた聞かぬ盆の夜さびし △一期▽

・家をそとに三年馴れつつ宵さむき

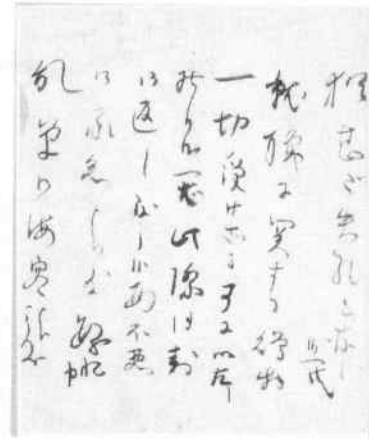
火桶のうへに手を寄せにけり △一期▽

額

・霧あかりかくおぼろなる土の上に

とほく別るる人やあるらん 一期

…書簡額 甚だ失礼と存じ候え共…



(赤彦36歳)

(読み下し)

猶甚だ失礼と存じ候え共、就職に関する贈物一切受けざる事にいたし居り候え、此の際同封御返し致し候。□悪しからず御承知下され度く、繁忙中乱御海容下され度く候。

(解説)

就職依頼のお礼を断わる内容 一期

書簡

・封書 「病める友よ」等、4通

一期

・葉書 「今夜は下宿にて」等、3通

二期

「今一つ申して」等、10通

二期

「話し度なつた」等、5通

二期

「高原君歓迎歌会」等、4通

三期

・絵葉書 「東の雲の」等、2通

一期

「木曾郡紅葉下」 1通

二期



(赤彦34歳)

書籍・冊子類

・歌集『水魚』他

全期

・研究書、赤彦自著『万葉集の鑑賞及び其批評』

全期

・赤彦についての参考書、20冊

全期

・歌誌『アララギ』創刊号・赤彦記念号

最終号・新アララギ創刊号

全期

・広丘小奨善会の新校訓・同校職員会誌

・学校日誌 各1冊、学事報告書 3冊

二期

・赤彦小学生時の地理ノート

(高島小、中等科3年)

二期

・玉川小父兄懇談会談話要項・親のしつけ

児童躰方・福島少佐 二期

・歌誌『アララギ』原稿

(十一月集・二月集・三月集・四月集) 4冊 三期

その他

・色紙(裏に写真) 1枚 二期

・写真 彌牟庵当時の人々の写真等、10枚 全期

特別参考品

・玉川村の歌 全期

・赤彦の肖像画 全期

・正岡子規・伊藤左千夫の書、写真各1枚 全期

・岩垂今朝吉の書、写真 全期

・玉川小学校新築校舍柱立式の写真 全期

※()内は展示期間



赤彦恩師の岩垂今朝吉書

没後八十年 島木赤彦遺墨リレー展
記念講演会 「赤彦を語る」

日時 …平成十七年十二月十一日(日) 午後一時三十分から三時まで
講師 …北澤敏郎さん



講師：北澤敏郎さん

ご紹介いただきました北澤敏郎でございます。

私の足がもう弱くなつて大変ですので、今日は申し訳ないけれども、座ってお話をしたいと思います。

さて、今日は赤彦を語るという演題でお話いたします。

一番先にはだねえ。本館の一番の目玉と思われる赤彦の五首の金屏風。これについてまずお話をしたいと思います。

まあ、私が読んで、それについて少し解説しようと思ひます。

船を出でし心現なし 真青なる芒乃中に入り

るかも

(同じうたの繰り返し)

これは、赤彦が八丈島へ、信州を出て、東京のアララギをやるということで出ましたが、出てすぐこの八丈島へ渡つた訳であります。この時の歌だな。心現なしというの、ぼうつとしたというような感じだなあ。船を降りて。そこはどこだかという真つ青なスキのなかに入ったことであるなあというふうな心境だね。

いとどしく青美静もる芒の中一人ぼうつたり行きとどまらず

(同じうたの繰り返し)

いとどしくは、大変いいという意味でしょうかねえ。ひとりでぼうつたりと降りたんだなあ。船から。そこは、真つ青なスキの中へひとりぼうつたりと。この一人ぼうつたりと言うような言い方が、一つの赤彦の感慨になるのでしょうか。そして、行き留まらずだから、ぼちぼち、ぼちぼちとあるいていくというふうな感じでしょうか。

青々し芒の中に一匹の牛を追い越しはるかなる道

(同じうたの繰り返し)

ずっと道が続いている。たまたま真つ青なスキの中

に、牛が一匹いたんだね。その牛を追い越して、道は遙かに続いている。なんか深閑とした静かなそういう情景でしょうかねえ。

(同じうたの繰り返し)

でかい言い方なんだなあ。背景を言っているんだね。前は、しますすぎ。同じすすぎでも、島にあるすすぎですますすぎという言葉を使っているんでしようね。いは接頭語だから特別に意味はないけれども、寂しいとしたあおいすすぎの中、さびしむ男。その背景をでかいこというわけ。これで、広々とした大柄な気持ちが聞こえてくる。

すすきの島吾のりて来し一つ船けぶりを吐きて去る

にかあるらし 島木赤彦

(同じうたの繰り返し)

まあ、すすきの五首だな。

すすきの島吾のりて来し一つ船けぶりを吐きて去るにかあるらし 島木赤彦

船が煙りを吐いて去っていくその様子を詠んで、この五首のすすきの歌を完結しているわけだね。だから、船から降りて、ぼうぼうとしたすすぎの中を歩く。そして、最後は、自分の乗った船がまた帰っていくという、こういう歌。島木赤彦と書いてあります。このこ

ろから島木赤彦。このころから赤彦という号をよく使うようになった。また、全体が特殊の情景で寂、寥といた方がよいかな。寂寥の世界だ。静かな寂の世界だな。まあ、非常に歌としても今までと違った考え方。そして、この字をご覧になったと思いますけれども、非常に素晴らしい字。本当に、まあ、赤彦の初期、中期、晩期とこういうように見ても、もう最高の歌でこの時が脂が乗った時じゃないかな。そんなふうに字もいい。歌もいいと。もう最高の一連です。『切火』という歌集に出ている。赤彦の歌集は幾冊あったかな。その中の『切火』という歌集にある。そして、五首についてですね。

それでは、どうしてこの館に、そんな屏風がきたかというそのいきさつをちょっと申し上げたいと思います。まあ、今日は赤彦の没後八十年を記念してこの第一期、第二期、第三期まで。若いときと中年と晩年と、まあ晩年と言っても五十歳で亡くなっているんだけど。それをこゝへ展示をして、六月から十二月まで長期にわたって、来たわけだ。

まず第一にあげたいのは、当館の目玉の一つ。この六曲半双屏風の五首。このものは、天下一品とっていいでしょうね。日本中にないでしょう。これだけの大きいもの、これだけの立派な屏風。歌といい。字もいいね。まあ、値段で言うわけにもいかないでしょうが、私の師事している新アララギの宮地伸一先生は、一千万円は下らないだろうと言っています。

それでは、この作品が何故当館に来たかということをごくかいつまんで、その経緯をお話したいと思えます。

赤彦が玉川小学校の校長より抜擢されて、諏訪の郡視学になった。その時のことであるが、諏訪の郡視学と言え先ほど茅野館長さんからお話がありましたけれども、郡の教育で一番大事な仕事である。もちろん諏訪郡全体の教育あるいは人事そういうような。その時に伊藤左千夫、これも赤彦の非常に大事な先生で教えをいただいた。その伊藤左千夫は、大正二年八月に亡くなつちやう。そうすると、その頃いた茂吉とか文明とか、特に茂吉はアララギは廃刊したらいいじゃないかと反対をした。ところが赤彦は聞かない。よしそれなら、俺は郡視学の職を投げ打つてもいいって、翌年の四月郡視学の大事な仕事を捨てて、そして上京し、結局は茂吉、文明、麓、中村憲吉とそんな大勢優秀なのがいたのだけれども、それが赤彦を助けて、そしてアララギの発行に努力した。こういういきさつがある。そのことの前に、郡視学の時に赤彦が、豊平小学校、すぐその私もそこへは勤めたことがあります。そこへ授業参観に行つたことがある。郡視学として、その時に、初めて授業担当者の竹内泰比呂先生に会つた。これは、アララギの会員を二、三年やつて、やめちゃつた先生だから、どこの人だか私は知らない。ちよつと調べたけれどわからない。とにかく竹内先生の綴り方の授業について赤彦がいろいろ話したあとで、その竹内先生が赤彦にいくつか歌を書いてもらいたいと頼んだ。赤彦は、「ほんじゃまあ、よしよし」ということで約束をした。

それから郡視学をやめて東京で、アララギをやるようになった。大正三年かなあ。ちよつと諏訪の高木へ帰つたことがある。そのことを聞いて、竹内先生は、もう一度高木へ行ってちよつと会いたい。そして会つ

てみたら、「おうよしよし」といつているんな話をしてきた。終わりのころ、先生お約束したあの歌を書いてくれないかと言うと、「おうよしよし」と、承知した。竹内先生は上諏訪へ飛んで帰って全紙を十枚買つてきたんだなあ。赤彦が大きい硯を出して、それから竹内先生は墨を擦り、奥さんも来て墨を擦り。とにかく、十枚買つてきた。

それで、赤彦はどの歌を書こうと思つたら『切火』のその年のすすきの歌五首、椿の歌五首だ。すすきの歌と椿の歌と結局十枚書いたんだなあ。竹内先生がその時の様子を文章に残してある。それを見るとね。まあ、すべるようにたちまち五枚書いた。すべるように。一句一句は、生の一匹の魚がぴんぴんとはねているよな。私の話しの後にもう一度見てきてくれるといいと思います。素晴らしいですね。

そして、ついでに椿の歌も五首書いたから。ちよつと十首になった。残りはバラバラになつてあつちこつちへ行つたらしいがね。それは、わからない。赤彦のうちには一枚残つている。あとの椿の歌は誰かどうかにいつたらしい。

そうして終わつてから、「こんな大きさというのは初めてだろうと。こんなでかいものは初めてだ」と。そして丁寧に新聞紙にくるんでね、それで渡すわけだ。「こりやまああ、書き初めの書き終わりだよ」と付け加えたという。

さて竹内先生はどうしかたというと、新聞紙にくるんで五枚持つていつたが、さつきいつたように、二年か三年くらいでアララギをやめていく。だから、赤彦に認められたが、私が調べたところによると、歌は、まあ、ちよつとやつたと言うだけだなあ。だからまあ

りに良い物だし、歌人としても二、三年の経験だけだから。結局、今、茅野市で寒天の間屋をやっている地紙世という今井さん、もう亡くなつたが、その奥さんが今井野菊という。これは歌人なんだ。今井野菊さんは私によくよくつきあつてくれたし、赤彦の弟子だった。彼女はえらかつたぞ。女学校一年の時にアララギに入会して、赤彦に教わっているんだ。それからねえ、四賀でやった赤彦の歌会に野菊さんも参加している。これははやいわね。だからして、アララギをおして赤彦の弟子になつていたわけ。そんなことで、なぜ竹内さんが、地紙世、野菊さんに渡したか、なぜということにはわからない。竹内さんも余りにも良い物だし、どうしようもなかつたじゃないかなあ。そこで野菊さんに渡す。そうして野菊さんはすぐに、「これはただ置いちゃいけない」ということで、それで京都まで出かけていつて表装したのが、今の屏風。それから保管をしていて、大事にして、門外不出にしてね。屏風になつて、蔵へしまつておいた。そういうことを私は知っているから、私がこの市の美術館長・初代の館長の私が、赤彦の遺墨展をやりたいとその目玉として今の屏風を今井さんに頼んだら、貸してくれた。これが初めての展覧となつた。今から六十年前のことだった。

もつとも地紙世は私とは遠いけれども親戚になるわけ。今井さんの姪を私の二番目の兄がもらつてゐるわけだ。そんなことで、遠い親戚筋だと言うことで、私も汀川の弟子、野菊さんも汀川の弟子だった。赤彦の弟子でもあつたが、赤彦は東京へ行つちやう。そんなことで私はちよくちよく今井家へ行つたことがある。そして展覧会が終わつたときに、私の口から漏れたのは、「こんなにすばらしいものが、もし博物館にあつたら、良い作品だし、宝になるなあ」ということをついで口を滑らしていた。

今の当主の久栄さんが、ずっと何年も頭の中から離れなかつた。そして、あそこの茅野市民館ができたので道を直したりして、あの住宅が動くらしいことで、それではあそこは引越さなくてはいけない、どうしようかと言つてゐるうちに、私をよんで、「北澤先生、あなたにあげる」というわけ。私もそんな物をもつても蔵はないし、これは困つたなあ。道路計画を進める市長には行き会はないという。それでは、私がもらうということにして、寄贈の名前は今井さんと、岳麓文芸館へお願いしたらどうかといつたら、それならいいと。そこでここへ、それで一昨年に、ここへ、宝として、目玉として、とこういふいきさつである。

いきさつはその程度にして、これから、赤彦のいろいろについて話を進めると、赤彦という人は、教育者として非常に優れている、歌人としてはみんなご存じのとおり。生まれたところは 上諏訪の角間。そこに公園の碑があつてね。そこに、昔は生家があつた。今はなくなつたが、生家は展示の写真にあるから見た人もいるが、非常に粗末なもの。そして、お父さんもずっと、塚原浅茅と言つて、これは廃藩置県になる前はおけ職として諏訪藩に仕えていた。おけ職と言うには桶を作るのだから、ごく貧しい。士族と言へば士族なんだけれど。そんな生家の写真を見てもつましい暮らしぶりわかる。廃藩置県になり教員になつて、この下古田の分教場の先生として、一家転任する。そうして赤彦の、そうね、士族だけれど、もとはやつぱ甲州から来たらしいな。そして、もうひとつのことは、このうちの家系は、建築の立川流。立川流と言へば、建築、彫刻の長野県ばかりでなく、よその県でも相当知られている。立川義昭も亡くなつたけれど、その人も立派で彫刻をやつていたなあ。芸術の家系も、塚原家には流れている。例えば、おけ職で腕が良くてこういうところをカンナをかけて、板と板を合わせるとピタツと付いて離れなかつたというから、だから非常に腕も良かった。そういう家系だつたな。それで芸術的センスが赤彦にも続いていた。

さて、少年時代の赤彦は、まあ元氣旺盛、野生児、そして、ごた。そして、その当時だから、戦争もあつて、軍人になろうと思つた。今、体験の森なんて言つている小泉山だなあ、毎日のように登つたという。すぐその古田というところから、すぐ登つて小泉山へ。鍛錬のために、軍人になるため、毎日のように登つた。けれども、父は分教場の教員で軍人になることに反対したんだなあ。戦争より軍人より「師範学校へいつてくれや」というように。それは師範学校へ入る前のことだなあ。

学校はどんな具合であつたか。小学校は、分教場では親父から直接教わつた。そして当時は高等科というのは高島学校のほかになかつた。尋常科を終わつた赤彦は、高等科へ行くために、下古田から上諏訪の高島校まで毎日二年間通つた。弁当を持つて。これはえらいことだなあ。まだ中央線は通らない。そうすると毎日通つて行き帰りには、野生児だからごたをする。いたずらをする。まあそういうことを二年間。その時の高島小学校の恩師が岩垂今朝吉。これは大物。諏訪の教育会の非常に大事な人物だ。今回の遺墨展にその写真が私が出してある。見ていただいたと思うが、その

岩垂先生の風貌を見てください。ひげを作って、いつでも着物で、懐が大きいから懐へ本を入れて通った。着物で袴で。たまたま私の親父両角喜重がその下にいて、高島小学校で、諏訪の湖南小学校の校長になったのが、二十九歳かな。うちの親父が高島へ来て、岩垂先生の下に来た。

今度は校長ではなく、今で言うなら教頭に。しかも、任んだうちが、岩垂先生のうちと長屋で隣だった。私が三つ四つくらい。ちょうど高島のお城の堀の傍らに長屋があつて、一家そろつてその長屋へ。私はおぼろげながら岩垂先生の風貌を知つたが、これは幸せであつた。そして岩垂先生に、わたしのすぐの妹は、そのふところに抱かれて育つた。そして赤彦が高等科二年を終わると、岩垂先生は育英会という、英才を育てる今で言う塾で育英会に入ることになる。

この大先生に教わつたのは奇縁である。縁というより他はないが、ほんとに幸せだ。赤彦が玉川小学校から転任して、岩垂校長の元に仕えると岩垂校長は、ほんとの生徒の時の野生児にはびつくりした岩垂先生も今度は教員として、こんなによくやるものかと喜んだ。小学校のときはこうだで困つたと、弁当の中へは勝手に蛙を入れてみたり。まあほんとにいろいろごたをしつたらしいけれども、こんなに変わるのも珍しいと言つて岩垂先生も言つたつていうからそういうだね。赤彦は高等科を終えると今度は育英塾を、これは期間があんまり長くなかつたようだったが、それから今度は泉野小学校や玉川小学校で代用教員をやる。それも元気がよすぎて、浅茅先生は、これじゃいけないということで、下古田の分教所の雇教員をやつた。代用教員をね。そしてその時にまた勉強をみてもらつたんだらう

ね、そして師範学校へ行つた。そういうことで今度は師範学校へ行けば、友達がたくさんいていい友達があつて、歌の勉強ができる。歌もちよつとは、旧派だけれどもね、代用教員時代に親父や友人などが歌を作つていた。旧派の歌だから、ほんとにやつたのは万葉集で、したのは師範学校へ入つてから。そしてそこで万葉の勉強をしたわけだな。そうして卒業をして池田小学校へ北安曇郡の会染学校つて言つたかな、そこでも勿論万葉の勉強をしたけれども、今度は初めて教員と



講演会のようす

してすばらしいことをやる。生徒観察簿、つまり受け持つた生徒の一人一人について成績簿じゃないんだよ、生徒の観察簿である。この子は将来何になるのが一番いいか、特色だけを成績ではなく、そういう生徒観察簿を今では？そういう生徒については、あるいは学校の子どもについては、次に後で行つた桔梗が原の学校でも奨善会といつて、児童に勤めるいわゆる修辞といえは堅過ぎるけれども、やつぱり児童のためになるいい言葉を残している。それもすばらしい。つまり教員としてもほんとに、全体としてはわずかだつたかもしれないが、非常にいい教育をしている。だから赤彦ひとりではないが前からの信州教育といわれたひとつになるわな、のちに信濃教育会の雑誌の編集をやつた教員としてもすばらしい。それから師範からやつた万葉集、そして池田小学校でたまたま亡くなつた生徒の遺憾の歌、万葉流で涙ぐんでるようないい歌を作っている。ここで万葉集と一緒に勉強した。だから教員としては非常に優秀で信州的なんだな、非常に信州的。池田小学校では野球が好きで、野球でよその学校へ出かけて行つてやつたり、運動もやるしまつたそういう勉強もする。子どももよくみてやる。亡くなつた子どもなんかをいたむ実には有名な万葉調のうた。それから池田小学校に二年いて、玉川小学校へ転任する。これがよかつただな。玉川小学校へきたらちようど同じ年に小井川小学校から岩本木外が転任する。これはもうすでにかなり有名な俳人で、ホトトギスなんかね。のちに子規に会つてるよ。東京へ行つて子規に勉強して諏訪の俳句について一日話をしてる。そういうこともあるわけだ。岩本木外、これは俳人。赤彦は、玉川小学校では早く言えば三回目なんだな。代用教員でいて、

教員でいて、また最後は校長でいて三回だ。当時の学校はこんな立派な先生が玉川や高島にいた。まあうちの親父喜重も、うちの親父はだから師範学校に入つたときに、四年生に赤彦がいた。それからだ。ずうつと死ぬまで同じ教員の道だから、兄貴として仕えた、兄事(けいじ)つていうんだがね。親父の関係だけれども、そうして米沢小学校二年のときじゃないかな、師範学校出て。お袋いなかったから、早く死んだからって親父ができればずつと諏訪の地へと嘆願に行つたそう。師範学校へ。そうしたら米沢小学校、芹ヶ沢のうちだからすぐ近くでよかつたが、そこに二年いた。その時にもう玉川に来た赤彦が、両角君来ないかといつてひつぱつた。玉川に来ないかといつてほれじゃあといつたわけだね。師範学校からの友達だからね。そうして親父も歌を勉強する。俳句も岩本から勉強する。そうして、その玉川で一番大事なのは彌牟庵だ。いわゆる彌牟庵というこれがあるわけ。たまたま宿直室にねむの木があつたので、それで彌牟庵歌会といつて、その岩本木外や赤彦や親父の両角喜重、雉夫つていうのはさつきいつたが赤彦がつけてくれた号だが、それから北山から幾人か来て、両角竹舟郎、両角福とか、篠原志都児とかそれから村の青年、そういうものがその宿直室へもちろん放課後だね、夜になるけども、その彌牟庵歌会と言つてそういう歌会をやつたわけ。そのことが非常によかつた。息が合つた。親方は木外。木外は先輩だから、年がな。木外は俳句をやり、赤彦は短歌をやつて指導する。そのことはあそこの展示室に私が歌碑彌牟庵跡碑というので大きいので書いてあるから、石刷りであるから、それを読めば誰がどんな事をしたかわかるし、もつと詳しくはヒム口やいろいろな参考書

に彌牟庵のことが書いてある。まあそうしてそこでヒム口という雑誌を出した。だから内容は短歌と俳句なんだ。そうしたらそれから半年後だよ、東京で伊藤左千夫が馬酔木、その次にアララギを発行した。だからヒム口よりも半年遅れてアララギが伊藤左千夫。そうしたらヒム口の人たち同人達は、会費も住所も全部左千夫のとこへ送つて全く統合したわけ。東京のアララギの方が半年後だよできてから、それでも先生は伊藤左千夫。伊藤左千夫はその前からヒム口の指導もしていた。それがよかつただ。それだから同じ先生だからそれでひとつになつてもいい、赤彦もそう思つたわけである。財産も会費も全部入れて一緒にやりましょう。こうやつてだからヒム口というのはそのヒム口の彌牟庵跡が先だからして、そういうことがアララギの一番元をなしたのはやつぱりここだと。今ヒム口というのはそのとき統合して無くなつたが、戦後森山汀川が戦後のいろいろの事情でできなくなつたからして、別に全国にその地区地区の歌会を作つた。そして汀川がやはり土屋文明の名前で、土屋文明が森山汀川、おめえやつてくれと、甲信越のヒム口達だ。今でも信越や甲州の人も入つてゐるが、そこで氷室という歴史をそこで書いてゐる。アララギのそれではなぜアララギの左千夫がヒム口の指導してくれるかという事をひとこと言わなきゃいけない。

湯川に篠原圓太、これが志す都の児と書いて志都児とよむ、もちろん男だよ。その孫が篠原圓平先生、それは健在でゐる。そのおじいさんが篠原志都児。それは私ももちろん知らないけれど、うちの親父なんかもよく知つてゐるけれども、それもさつき言つた彌牟庵歌会に来ていたんだ。そして左千夫にも歌を見てもら

つていた。そうしたところが篠原圓太、つまり篠原志都児は戦争で従軍するわけ、その従軍する時に左千夫も知つてゐてその時に励ましの歌なんかも幾つか作つて、志都児にやつた。そして志都児は満州、朝鮮のちよつと満州だな、戦争に参加したけれどもすぐのようだな、ほとんど戦闘はしななでしよう。脚気になつて帰されちゃうわけ。そうして東京の陸軍病院へ入院する。そうしたら左千夫が志都児の見舞いに、それはこつちにいるときにすでに篠原志都児の立派な事を歌で知つてゐて、それから戦争の時には、出兵の時には激励をした手紙や書いたものや歌をやるなどを、よく左千夫の頭の中であり、陸軍病院へ来た時に真つ先に見舞いに行つた。それに感謝して、それも脚気だから案外早く治つたのか、退院になる。そうして退院のときに、すぐにうちに帰らないで左千夫の家を訪ねて三日ばかりいたらしい。その時によくよくほんとの弟子になつたということでしょうかね。まだ赤彦たちは左千夫とは指導は受けたが、行き会つていない。まつきに左千夫と会つたのは志都児。そういうことで左千夫と志都児の関係はこれは一般に愛弟子と言つてゐるとおり、本当にかわいがつて指導した。そして三日ばかりして自宅に帰つて来る。そしてまもなく左千夫が諏訪へ遊びに来るわけだが、初めて。それは志都児がいたから。そこで諏訪の歌会をやつたり湖で遊んだり、それはおそらく左千夫がいかに愛弟子として愛していたか、赤彦はそのときに初めて会つてゐるんだ。そうして上諏訪へ来たなら赤彦は知らないで、出迎えていたけどわからない、馬車が来からどうも馬車に乗つてゐる人が左千夫ではないかと声を掛けたら左千夫で

あつた。ほんとに知らない人でも風貌で察知をしたんだね。そうして旅館へ連れて行って歌会をやる。それから次の日に湖水へ行つて舟に乗つて遊ばせる。それでヒムロやそういう人たちが大勢はじめて合つた。そうして終わった後で左千夫を連れて志都児は北山へ上つた。そして今の親湯、親湯と書いて親湯ね。なにか志都児とそのうちと親せきと聞いたから、そんな関係もあつた。あそこで幾晩も泊まつて、左千夫はね。そうしてそこで歌を作つて、その時に作つた歌が蓼科詠というので十首ばかり、そして書いて、今度は温泉が終つて幾日かいて志都児のうちに泊まつているんだ。その時にその蓼科の歌十首ばかり、それは今大事にして市の文化財に、まあ私が主だけれども文化財に申請して、それも目玉のひとつかな。そういうよう志都児がいるからそれで四回から五回来ているんだ。左千夫は。それでいつでも志都児のところの、泊まる所はそこ。だから左千夫とその関係とは来てくれたあるいはヒムロ同人たちがみんな弟子になつたのはその手引きになつたのは志都児ということになるな。左千夫がこれだけ指導してくれたのは、ヒムロのためにもよかつたけれども、志都児のおかげということになるかもしれないな。まあそれもアララギが九十年で終わつちやつた。これは九十冊で終わつちやつた。そして今は四つに分裂して同じアララギで主義主張は全く同じ。写生道だ、叙述だ。他の派もいろいろある分れなんでもいいことを分かれちやつたんだ。残念だけれども九十年で終巻。まあその後、私は今さつき言つた宮地先生の「アララギ」、そういうような全国で二番目に大きいかな、何千人いるかな、まあ私もその一員ということになる。それからまだいろいろ言いたいだが、

赤彦のもう一面だが、童謡集がある。第一童謡集、第二の童謡集、第三の童謡集。私どもは小学校のとき副読本として読んだ。今でもね、下諏訪の赤彦記念館で童謡を小学校の生徒から全国の大人にかけて募集して毎年その童謡集を募集して作つていく。だからその脈々として、そういういいものを今でも赤彦を慕う童謡といふことで、私どもは今言つたように小学校の時に昭和童謡集を読んで、副読本だ。そのひとつにね、これは今その童謡集の選をね、私ももういやだつて言つて頼まれて毎年やつていっているんだが、その選を選者の一人としてやつたら、今日はね、その一つで貰つたものだが、貰つたもので有名なものがある。赤彦が書いたもの、これはコピーだがね。諏訪の殿様つて題だ。諏訪の殿様ぼたもち好きで、宵に九つ朝七つ、二つ残して袋に入れて、馬に乗るとぼたんと落とし取るにや取られず捨てるにや惜ししそこで家来しゅ皆目をつぶる家来まなこはつぶりもしょうが木の上のからすの目はつぶられぬ屋根にからすが見てござるとある。それは私は選者のお礼として三枚もらつた。だからこの一枚はこの館へ寄付するで、館長さんまたよかつたら、コピーだけど、もちろんコピーと決まつているけれども、よかつたらいつかの時にまた。これは余分があるからここへ寄贈します。そのいきさつも書いてあるかな。

それからもうちょっと時間があるから一言あるところだ。八丈島へ、東京に行つてからだよ、なぜ八丈島へ行つたか、今でも分からない。説がある。あそこでもう一度教員をやろうと思つた。あの、八丈島でそれはどうか。もう一つはこれはかなりしつかりした、あそこで作つた歌を『切火』とした。歌集の名前

を。切火とはなんだろう。おそらく火を切る、火といふのは桔梗ヶ原の学校、広丘小学校だ。その時に恋愛事件があるわけ。それは赤彦が校長で行つた時に、たまたま女子師範を出た娘が、その恋愛の相手、これは牛屋といふ今でもある、その広丘の牛屋といふ大い家に赤彦が下宿をする。そうすると女子師範を出た静子もその牛屋へ泊まるんだが、それは場所は庭のほうに離れがあつて、そこで自炊。けれども毎晩のようにならぬ赤彦を訪問して歌を教わつたりしているうちにいわる恋愛の気持ちになつた。それがなかなか赤彦も歌にも作つていふし、そのうちに職員やあるいは村の人たちにもそういうことが分かる、まあ恋愛がいけないわけではないが、立場上やつぱり校長と女子師範の恋愛といふことはね、かなり赤彦は堂々としていたけれどもやつぱり村の人達や職員がまずい事もあるんだ。けれども赤彦はそんな時はもう子供もこつちに置いて一人で行つていふからで、子供だつてかなり大きくなつていふ、そして幾人か子供があるからね、まあそういうことは赤彦は苦にしない。結局ねえ、苦しめないけど、やつぱり苦にしたんだ。それでこの学校をやめちゃう。これはしょうがないかなあ。

前にいた玉川小から高島の学校へ転任の時には、岩垂今朝吉先生のとこへ行つた時は教頭だ。校長じゃないよ、まだ教頭だ。けれどもいろいろの、岩垂先生といふのはね、堅物でしかし論語はできるし、学問はうんとした人。赤彦は信州的だ、非常に新しい。非常に新しい教育をめざして、革新的だ。だから合わないんだ。それでやめちやつたんだ。そして鶏飼を一年やつていくうちに、鶏飼つたつてほんとに専門じゃないから、結局失敗しちやつて、みんな鳥は死んだり

病気になるたりして、それでやめてその時に同僚でいた先生が郡視学で、それじゃ広丘へ来いというので教員に戻ったとこういうことだ。そこでまた今言ったような恋愛事件を起す。しかし赤彦は桔梗ヶ原の二年というものはすっかりまた歌が新しく変わったんだ。恋愛ということとはそういう面で道義的で言えばそれはまづいかもしれないけれども、赤彦のためには一時進展、そこで変わっちゃった。相当変わっちゃった。それでまた結局は最後のように赤彦のよさつてものはまた一皮向けて、だから恋愛は赤彦にとつては道義的にいえばいろいろ言われるかもしれないけれども、よかつたところということがいえるんじゃないかな。そうしてその恋愛のこれはかなり手紙のやり取りでね、相手だつて長生きをして、赤彦がやつた手紙なんか持つているんだ。それを戦後、赤彦は大正十五年に死んじゃつたけれど、戦後まで持つていてそれを本に表しているんだ。静子は。そうだからどんな手紙が行つたか、みんな分かつちやつた。戦後は秘密にするわけにはいかな。赤彦は秘密にしておきたかつた。まあ『火切』なんだから、切火というのはその恋愛の火を消すために渡つたではないかという説があるが、私もそれに近いな。そうでなければなんであんな所へいつたかわからない。すすきの島へね、教員になりたいて言つたことも赤彦は言つたらしいけど、それも否定できない。そうして東京へ帰つてきた。赤彦は八丈島へは、やっぱり好きな人と女性があつたり、追つかけて来るんだ東京まで。赤彦っていう人はね、やはり非常に歌も上手いし教育者だけれども、人に好かれる女性に好かれるっていう人らしいね。魅力があるんだな。魅力がある。そういう風と言つたほうがいいんだね。

鍛錬道つていつてほんとに鍛えに鍛えて勉強して努力したがそれだけ立派になつた。同じよく比較される斎藤茂吉。これは天才。今まで誰も歌つたことのないような様子をぼんぼんと歌っている。そして第一歌集のあらたまなんていうのは当時出たときに、みんなが一般の歌会だよ、あのアララギばかりじゃない他の人だつて皆びつくりして、すごい歌だつた。第一歌集で一番早く名前が出ちやつた。天才。茂吉は天才、赤彦は努力の人。まあ私の歌はあつちこつちで、申し訳ないけれども、まあそんなとこだないくら平々凡々、もう時間。ちようど十分ばかりあるけど、もう過ぎたかな。さて、それじゃ、私の知つている事はお話するが、知らない事は知らない。(質疑無し)

〔進行係より〕

それでは最後になります、赤彦の肉体的な面、赤彦らしさという事を付け加えていただいて終わりにしたいと思います。

私はほんとに赤彦について、親父からもうちよつと聞いとけばよかつたけれども、あるとき赤彦があんなに偉くなるとは思わなかつたつて一言いつたかなあ。つまり師範学校の時からの交わりで、一生死ぬまでも仕えていたんだが、やつぱり死んでからあんなに偉くなると思わなんだ。天才ではないが、鍛錬努力の人だなあ。

それからやつぱり人間として、小さいときはごたごたつたけれども、やつぱり鍛錬に鍛錬をして、人間ができてたんじやないかなあ。それからさつきも言つたが、やつぱり恋愛事件もひとつだ。思い切つて大胆とい

えば大胆だが、たとえばだよ、いよいよ東京へ乗り込んでいくと、郡視学やめて、四月の始めだ。東京へすぐ行くと思つたら、長野へ回つて、軽井沢で彼女と泊まつている、宿屋で。ということははつきり関係があつた。それから彼女とはどうも彼女の歌集を見ると、歌集のもようでは子供があつたらしい。それは闇になつたけれどもね、生まれてはこなんだけれども、どうも子供がいた。それは彼女にはつきり幾つかの事が、私が言っているじゃなくて、つねに研究家が言つての。歌集で、そういう。子供までいる、それをおろしたか、流産か知らんけどね。だからよつぽど力をいれていて、いずれは彼女と一緒になるということも言つてゐるんだよ、赤彦自身が。そういうのが残つちやつてゐる。それは彼女が残した。まあ切つても切れない縁だつたかもしれないし、まあそれが赤彦を偉大にした一つだろうな。

単に女だから、女性に魅力があるつていう薄つぺらなものではなくて、しんのそこから彼女を愛していたのかもしれない。しかし表向きはやつぱりどうしても切火だよ。きらなきや。それはおつたらしい。まあ人の気持ちの奥深くまではわからないけれどもね、かなりそういう面があつたんじゃないかと思うね。まあ偉大なる人でしようねえ。常人ではない。単なる努力家でもない。やつぱり心の広いそういう人だつたかもしれない。私は本当に少年の時代でね。一度も会つた事無いから、そういうものを通して、親父の話をそれもちよいとばか聞いたぐらいでね、いけないけれども、そんなところで以上で話を終わります。(拍手)